書　評

塚本恭章『経済学の冒険 ―ブックレビュー＆ガイド100 ―』読書人，2023年９月

森　本　壮　亮†

大学で社会経済学（マルクス経済学）の授業をしていると，時折学生から，社会主義やマルクス経済学に関するおすすめの本を教えてほしいと質問されることがある。そのようなときは，近年の話題書を２，３冊紹介するようにしているのだが，本と人との間には相性があるので，紹介した本がその学生の興味をひくものか自信がないのが本音である。市場，貨幣，資本主義，社会主義といったテーマについて近年の100以上の経済書をレビューした本書は，これらのテーマについての書を学生自身も探せるようにしてくれるうってつけのガイドブックである。

本書は，前半に60のブックレビュー，中盤に40のミニブックガイドを挟んで，後半に2016年～22年のそれぞれの年に刊行された書をふり返る補章，ブックレビューの枠を超えるやや長めのエッセイや対談の特別編という構成になっている。プロローグやエピローグに加えて，各章の間に間奏曲としてのエッセイや本書へのリアクションが散りばめられている点は，他に例をみない本書の特徴だ。

前半のブックレビューでは，第１章で「市場と貨幣」にかかわる10冊，第２章で「資本主義と社会主義」にかかわる20冊，第３章で「経済思想と経済学説」にかかわる15冊，第４章で「人間社会と自伝・評伝」にかかわる15冊が紹介されている。それぞれに著者なりのタイトルがつけられている点が独特であり面白い。

トップバッターとなる一つ目は，西部忠『市場像の系譜学』『貨幣という謎』。最後のエピローグにもあるように，この『市場像の系譜学』こそが著者の人生を変え，企業からの内定を辞退して大学院進学を決断させた書である。その意味で，本書タイトルの「経済学の冒険」とは，本書を読み進める読者との冒険であるとともに，著者自身のこれまでの冒険であるともいえる。

以下，第４章まで60冊（複数書のレビューもあるので，正確には60冊以上）の本がそれぞれ２～８頁でレビューされているが，ひときわ多く登場するのが，岩井克人氏と伊藤誠氏の著書だ（いずれも４回）。いずれの氏についても後半の特別編で独立に節が割かれているが，レビューからも両氏に対する特別な思いが伝わってくる。

特に，岩井氏の『二十一世紀の資本主義論』を第２章「資本主義と社会主義」の冒頭に配置しているところに，著者の岩井氏に対する並々ならぬ思いが見てとれる。なぜなら，「社会主義経済計算論争の史的展開―競合的学派の諸相」を学位論文とする著者にとって，「資本主義と社会主義」というテーマこそが一番の専門であるからだ（だからこそ，第２章が最もレビュー数が多い）。各章のレビューにどの本を入れるか，そしてどのような順番とするかは，著者がレビュー以上に最も悩んだところであろう。しかし著者はこの場所に，伊藤誠氏の『市場経済と社会主義』でも，その他の社会主義論やマルクス経済学を専門とする経済学者の著作でもなく，それらを専門とはしない岩

†立教大学経済学部准教授

井氏の当該書のレビューをあえて書き下ろしの形で配置した。ここに，著者の岩井氏に対する高い評価が表れている。

このことは，間奏曲の３と６，エピローグ，そして本書の最後に配置されたエッセイ「岩井克人先生のICU国際基督教大学最終講義―独自の理論を語り続けてきた半世紀」で，より熱く語られている。「資本主義と社会主義」というテーマを考えるとき，市場と貨幣（第１章のテーマ）についての考察からアプローチするのが常道である。しかし著者は，新古典派経済学やマルクス経済学の貨幣理論や価格理論ではなく，いずれでもない岩井理論からアプローチすることを見据えているかのようである。

しかしこのようなアプローチはかなり異端であり，多くのマルクス経済学徒にとって受け入れにくいものであるのも確かだ。岩井理論は，まさにマルクスと同じテーマについて考察しているにもかかわらず，あえてマルクスを等閑視しているように思えるからだ。同じことは，第４章でレビューされている岩井氏の師でもある宇沢弘文氏についても当てはまる。ただ，岩井氏や宇沢氏をはじめとする新古典派経済学に近い立場の学者の本や理論に対してもニュートラルに学生のような態度で接する著者は，マルクス経済学と新古典派経済学との断絶を架橋し，新たな知見を両経済学にもたらす可能性を秘めているのかもしれない。今後の研究に期待するところである。

対して，伊藤誠氏の諸著作へのレビューやエッセイは，多くの読者にとって素直に興味をひくところであろう。特に特別編の伊藤氏との対談は秀逸である。絶妙な距離感で伊藤氏から重要なポイントを聞き出すことに成功しているところは，良き師弟関係だったからこそなせる技だろうか。伊藤氏の発言部分を読んでいるとき，評者の耳には今は亡き伊藤氏の声が聞こえてきた。著書を読んでいても，このような体験はめったにない。対談の魔力であるとともに，著者の力量と才覚を感じさせる部分でもある。

本書を読了したとき，経済理論や思想についてのレビューをたくさん読んだような気がした。「経済学の冒険」というタイトルが示すように，現実経済の問題というよりも，市場や貨幣，資本主義や社会主義について経済学はどう考えてきたかがわかるように選書され，レビューされている。レビューで現実経済について言及する際も，一歩引いたような禁欲的な記述がされている。その中で，現実の日本経済の問題を具体的に論じた森岡孝二氏の著書（『強欲資本主義の時代とその終焉』『雇用身分社会』）に対するレビューは異彩を放っているように思えた。

経済学説史の世界を勉強すると，経済学説は決して一つに収斂するようなものではなく，多様で色とりどりの山脈がたくさん存在していることに気づく。著者は本書でそれを「本脈」と呼んでいるが，そのような本脈を縦走した後は，それぞれの本脈の経済学者と同様，時代の経済問題に正面からぶつかることが課題となるだろう。今の日本や世界が抱える経済問題について，著者はどのような経済理論でもってどのように分析するのか。本書の冒険を活かした塚本経済学という山を，次著で見られることに期待したい。